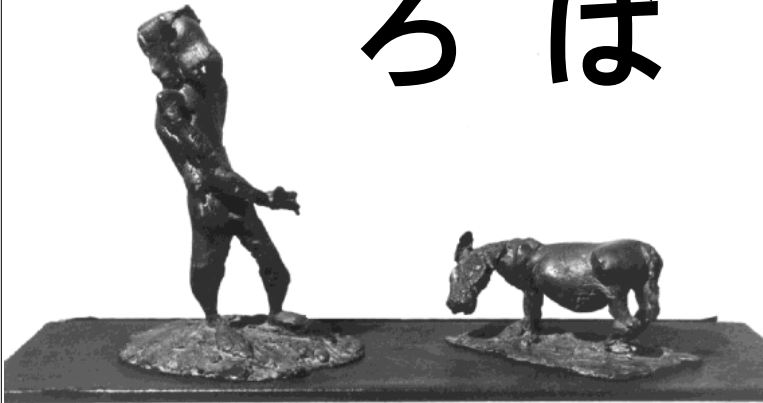


# ろば



## 百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時30分  
於 東京家政専門学校2階  
聖書研究会：第1・3水曜 午後7時半  
於 Zoom

連絡先：〒162-0066 東京都新宿区  
市谷台町14-1-701 賈晶淳 方  
TEL/FAX 03-6273-2930

<http://www.hyakunincho-church.com>

郵便振替口座：00180-8-565379



### 私の目線(九〇)

踏み留まること、考えること

坂 真理子

七月、新聞記事の見出しの表現にぎよっとした。「クマムシ 銃弾にされても耐えた」!! 生き物を銃弾にするって、どういうこと?

「空気のない宇宙でも、強い放射線にさらされても生きられる『最強の生物』クマムシが、弾に詰められて銃で発射されても死なないことを英ケンブリッジ大の研究者が実験で確かめた。生命力の強い生物が隕石などにくつついて宇宙を移動できるか検証する一環という」との記事。地球の生命は、他の星から隕石や彗星にくつついて運ばれてきたとする説があるそうだ。クマムシは生命の運び屋の有力候補で、宇宙から地球に落下するときの衝撃に耐えられるか検証したかったのだとのこと。

なぜ私はこの記事にぎよっとしたのか。それは、人間が自分たちの知識欲を満たす目的で生命体を実験に用いていることに違和感を感じたから。科学的な説明をせずにそのままにしておいていい不思議もある、と思う。でも「高度な」文明の中で生きる人間は、物事を明らかにせずにはいられないようだ。

環境破壊も、人間の知識欲がその原因の一つだ。それは世界で共有されている。二酸化炭素の排出量削減のための各国の取組に期待したい。また個のレベルでできることとして、自分の生活も見直す必要がある。しかし現在の私の生活は、環境破壊に加担する一面を有

した道具、システムがあるから成り立っている、それが無いと健康な毎日が送れないようにもなってしまうている。高度な技術、便利な生活を手に入れるのと引き換えに失ってしまったものに思いを巡らせる。穏やかな気候の春と秋、しとしとと降る雨の梅雨、網戸に扇風機で過ごした夏休み。少女時代の四季の感覚が懐かしい。一説によると、一九七〇年代後半の生活規模を実現すれば、気候変動は最小限に抑えられる可能性があるとのこと。その時代には無かったものを思い浮かべ、そのくらいなら我慢できるかもしれないと思う。

人間の知識欲には、恩恵と捉えることのできる成果を生み出す一面もある。例えば、医療技術の進歩により身体機能の保全が可能になったこと、救えなかった命を助けることができるようになったこと。また、ITによるコミュニケーション技術の向上により、離れた場所にいる人とリアルタイムで会話が楽しめるようになったこと、重度障害のある方の意思表出が可能になったこと。これらは素直に喜ばしい産物だ。

人間の知識欲を「よい」方向に向けるのか、「望ましくない」方向に向かわせるのか。また、「よい」方向に向けて得た産物を「望ましくない」方向に活用しない理性を保てるか。勢いに流されず踏み留まり考えること、意見を交わし合いよりよい道を選択していくこと。とかくスピードが求められる世の中だが、それが大事なのだと思う。

## 「八・一五」が意味するもの

趙 容來

今日は七六年目の「八・一五」である。韓国ではこの日を「光復節」と名付け、日本の植民地からの解放、つまり国の光を取り戻したという意味のお祝いを行なう。同じく、日本では敗戦日または終戦日といい、一五年も続いた戦争が終わったことを記念する。

確かに「八・一五」で戦争は終わり、韓国は解放された。が、どうもこの日のことはすつきりしない。「八・一五」に絡んだ歴史が韓国とともに清算されていないからだ。韓国では新政権が登場するたびに「過去史の清算」を掲げる。植民地時代の日本帝国に密着協力した者への処罰が不十分だったし、未だに日本との関係はいつも揺れ動いているからだ。

同じく日本でも、「戦後政治の総決算」「普通国家論」「九条の破棄」などが度々主張されている。敢えていえば、侵略史からの決別宣言が不十分だったし、過去の過ちに対するきちんとした謝罪と反省が足りなかったためだ。両国ともに過去から抜け出ていず、過去に引きずられているようだ。

この頃、韓日関係が一九六五年国交正常化以来最悪だとよくいわれる。この背景も清算されていない「八・一五」と無関係ではない。

旅行などで日本になじむ多くの韓国人は「町

の中で出会う親切な日本人と謝罪を惜しむ日本とのアンバランスは何故だ」とよく聞く。答えとして、私はとりわけ千鳥ヶ淵戦没者墓苑にある二つの碑文を紹介する。「国のため命を奉げし人々のことを思へば胸せまりくる」（一九六〇年、昭和天皇）と「戦なき世を歩みきて思ひ出づ かの難き日を生きし人々」（二〇〇五年、平成天皇）。両方ともにあの戦争で亡くなった人々に対するものだが、心痛むことだけで、謝罪は見当たらない。

また、日本政府が国民を戦争に巻き込ませたことについて一度も謝らなかつたことも取り上げる。旧日本軍人に対する恩給は与えているが、戦争と非常事態下で民間人の身体や財産の被害については、「国民は我慢しなければならぬ」という一九六八年の最高裁の判決（受忍論）に縛られている。信じられないが、日本国内ですら戦後処理がまだ終わっていない。なのに隣国への配慮が期待できるかと説明すると、人々はうなずく。

しかし、だからと言って日本のやるべき歴史清算が免除できるわけではない。この問題はまず日本市民社会のなすべき課題である。また韓国市民社会にとつても、韓日関係の難しさを認識する上で、清算という目標を求め

て忍耐強く努力すべき事柄であろう。

韓日関係に対する世論調査からも関係悪化の状況が浮き彫りになっている。昨年九月韓国の延世大学の東アジア研究所と日本の言論NPOが両国市民それぞれ一千人に対して行った共同調査によれば、「相手国への否定的認識」は、韓日それぞれ七一・六％、四六・三％で、韓国での日本に対する否定的評価が相当高い。ただし「両国関係は重要だ」という答えは、韓国では八二％で非常に高く、日本でも四八・一％で否定評価をやや上回っている。現在の韓日関係は確かに大変厳しいが、両国関係の重要性については両国の市民が深く認識している。両国関係は最悪だけれども、改善の余地がないわけではない。

韓日関係の悪化要因は、韓国大法院（最高裁に当たる）の徴用工への賠償判決と日本の反発、韓国政府の慰安婦合意棄損、日本政府の対韓輸出規制、韓日軍事情報包括保護協定の不安定さなどがあげられる。それだけではない。両国間葛藤の根源を遡れば、一九六五年両国の国交正常化のために締結した韓日基本条約と四つの付属協定、すなわち「六五年体制」にぶつかる。問題は、戦後二〇年が経ってようやく韓日両国が国交正常化に踏み切ったが、条約文のどこにも植民地支配に対す

る日本政府の反省や謝罪を表す文言は書かれていないことだ。同じく賠償や補償という言葉も載っていない。つまり六五年体制は最初から両国間の葛藤要因を孕んでいた。最近の韓日関係悪化は、本来の葛藤要因が二〇一〇年を前後にして浮き彫りになった結果でもある。このことを的確に把握するには今日までの両国間の流れを顧みるべきである。

六五年体制は、一九六五年から冷戦終息、脱冷戦から二〇一〇年前後、以後今日まで、というように大きく三つの時期に分けられる。

第一時期は冷戦のさなかであり、韓国軍の軍政権は南北対峙状態を懸念し、日本に対して過去史清算より経済支援と安保協力を求めた。日本政府はそれを歓迎した。韓日基本条約は当時の韓日政府の妥協の産物にはかからない。東アジアにおける冷戦構造の中で、米・日本・韓国とつながる垂直的な同盟者関係が固められた。当然韓日関係は葛藤と対立を最小限度に抑えられ、いわゆる両国間では反共韓日友好構造が作られた。まるで韓日関係はうまく運ばれているかにみえた。六五年体制の問題点は水面下に沈められ、その代わり韓半島の緊張はますます高まった。

第二時期は、一九九〇年代の脱冷戦期に入つてイデオロギーによる陣営対立が和らぎ、

それだけに韓半島の南北対話の動きも具体化されたし、水面下に沈められていた過去史清算のことも含めて新しい変化の風が韓日の間に吹き始めた。慰安婦問題が前面に登場したのもこの時期だった。一方、韓国では冷戦終息直前の一九八七年民主化闘争が実りを結び、権威主義政権の清算がはじまった。

この時期、慰安婦・徴用工問題など韓日間の葛藤要因が本格的に浮上したものの、韓日両国はいくつかの意味ある努力を行なった。まず、韓国の金泳三政権は、一九九三年三月「慰安婦問題に関しては日本に賠償を求めない、補償は韓国政府がする」と宣言し、日本に対しては「謝罪と慰安婦問題をもっと調査して後代に知らせよ」と求めた。この宣言の趣旨は以後の金大中政権にも受け継がれた。

また、二〇〇五年盧武鉉政権は「徴用工に対する補償は請求権協定の当事者だった韓国政府が受け持つ」と宣言した。二三十万人以上の被害者は改めて被害届けを申し出て、その内約七万三千人に補償金を与えた。毎年医療支援金などもあり、これまでの徴用工への補償総額は約七千億ウォンに及んでいる。

韓国政府の前向きな動きに対応して日本政府も応対した。軍による慰安婦の直・間接的な強制動員を認めた「河野談話（一九九三年）」、

植民地支配と侵略に対する反省とお詫びを盛り込んだ「村山談話（一九九五年）」、強制併合一〇〇周年を迎えて当時韓国の人々の意に反した併合だったと反省とお詫びを表明した「菅談話（二〇一〇年）」が登場した。また、一九九五年日本政府は元慰安婦のために国民募金と政府支出を合わせて「アジア女性基金」を作り、一人当たり五〇〇万円と首相のお詫びの手紙を送ったこともあった。

しかしながら、両国の努力にはいくつかの限界があつた。まず、被害者優先主義からかけ離れており、被害者支援グループとの打ち合わせも十分ではなかった。また、政府の説明・説得努力も足りなかった。関連措置をとる前に、またその措置の持続性のためにも趣旨を説明して国民の共感を得るべきだが、どれも不十分だった。たとえば、盧武鉉政権以後の政権は徴用工補償措置の拡大はおろか、補償対象から脱落していた徴用工への配慮や対応がうまく作動しなかった。

日本政府も意味ある関連談話に対して国民への説明や説得努力はなかった。たとえば、日本政府はアジア女性基金を作った際、政府支出のことについて政府次元の賠償と見なされるのではないかを懸念して国民には内証にしていた。国民に対して説明・説得はおろか

真実を歪曲する場合もあった。二〇一四年安倍首相は、河野談話の内容を疑い、事実検証を行なったりもした。のちに彼は国会で河野談話を政府の公式立場として受け継ぐといったが、一度傷つけられた河野談話はすでに日本社会の中で存在感を薄くしてしまった。

脱冷戦期に入ってから日本政府が意味ある談話を次々と発したのは評価できる。その延長線上に一九九八年金大中・小渕の「韓日新宣言」が行われた。両国が未来のための 동반者になろうとしたこの宣言は素晴らしい。

しかし、日本政府の歴史清算はままならなかった。数々の談話と宣言があつたが、それらにふさわしい姿勢変化がなかったからだ。過去史反省とお詫びにもかかわらず、日本政府は「六五年条約で韓日関係の懸案はすべて終結した」という既存解釈をまったく崩さなかった。既存解釈と諸談話の内容が不一致であっても日本政府は何の追加措置を取ろうとしなかった。これが二〇一〇年前後からなる第三時期に険しくなる両国葛藤の背景である。第三時期の特徴は、中国の浮上、日中のGDP規模逆転、国際社会における日本のプレゼンスの急低下、韓国の経済力拡大などである。中国の存在感拡大により、世界は米中対立構図の新冷戦の道に入っていく。韓国は自

信感を増して日本に対する慰安婦・徴用工問題などの清算要求が年々増幅する。反面、日本は変化に追いつかず、むしろ二〇一二年以後安倍政権の再登場と共に日本は焦りつつ保守右翼の道に拍車をかける。諸談話にふさわしい追加措置を取り入れるより、嫌韓ムードに便乗して歴史清算をないがしろにしていた。

そのような日本社会の流れの中で結果を作り出した二〇一五年の慰安婦合意は、反転の糸口と期待された。しかし、国民に対する説明・説得力の足りない両政府はそれをうまく管理できず、結果的に両国間の溝をさらに広めてしまった。今日私たちが感じている最悪の両国関係の真相はまさにこれである。

韓日は二〇二五年国交正常化六〇周年を迎える。両国の間に山積している葛藤要因を一つ一つ取り上げながら、すでに成果を上げている金・小渕の新宣言のように、「二〇二五ヴィジョン宣言」が切実である。補償と謝罪の分離対応、韓半島と東アジアの平和のために両国が協力する、未来をとみに開いていくなど、いくつかの原則をたてて両国が開き直るべきである。その時になってはじめて、私たちは真の解放と復権の「八・一五」を迎えることができるであろう。

(二〇二一年八月一五日証詞より)

## 新型コロナウイルスの大流行で思い出したこと

古野 明美

昨年春、新型コロナウイルス大流行のきざしが見え始めた頃、私は六〇年前に経験したことを思い出していました。

脊髄性小児麻痺の病原体・ポリオウイルスは、「口」から感染して咽頭や小腸粘膜で増殖、大部分の人は不顕性又は感冒程度ですみませんが、ウイルスが血管を通過して脊髄の一部に入り込むと、手足に急性の麻痺が現れることがあります(感染者のパーセント以下)。

このウイルスの感染を防ぐためのワクチンは、米国のソーク博士らによって開発され一九五五年にソークワクチンとして使用されるようになりました。博士は特許を取得しませんでしたから、日本でも国産ワクチンの製造が準備されていましたが、国立予防衛生(現・感染症)研究所は、「ウイルス・リケッチャ部」の一室を「腸内ウイルス部」として独立させて新築の別棟に移し、一九六〇年秋から国内六メーカー製ワクチンの検定を始めました。次年度一九六一年四月には総勢八〇人に増えました。新入の殆どが獣医・薬系の新卒者で、四年目の私も似たようなものでした。強毒の生ウイルスを扱うに当たり、全員が採血されて抗体有無のチェックがありました。

が、私は3タイプのうち2型の抗体有りと知らされました。衛生環境が悪い乳幼児期に感染して事なきを得ていたようです。

強毒ウイルスをホルマリンで不活化したソークワクチンの検定は、生き残りが無いこと及び免疫効果の確認で、私が所属した室の担当は、最終製品になる前に採取された「汲み取り液」の「組織培養安全試験」でした。より重要な安全試験は、猿の脊髄に注射して麻痺が来ないことを確認する「脳神経毒力試験」ですが、ここは獣医出身者の出番でした。

組織培養された猿の腎臓細胞に接種して、ウイルスによる細胞変性がないことを確認するに当たり、ワクチン液のホルマリンを抜くための透析に、先ず四日程かかりました。回収液1・5リットルを細胞に接種して二週間観察、異状がなければ一部液を次の小規模培養に接種（サブカルチュア）して更に二週間観察、異状が無ければ検定合格となります。

無菌操作が必須で、壁四面タイル、床には排水口がある、浴室のような無菌室で四十五人の作業でしたが、四週間異状なく検定合格までもって行くのは簡単ではありませんでした。

六メーカーから次々入るので日々忙殺される中で、九州を中心に大流行のニュースが毎日入って来るようになりました。

不活化ソークワクチン以外に、セービン博士によつて弱毒ウイルス使用の生ワクチンも開発されており、ソ連などで安全性と流行阻止の成果が報告されていきましたので、「生ワクチンを輸入して・・・」というデモも盛んになりましたが、ソ連の結果に頼ることに不安があったのか、日本の関係者は中々輸入に踏み切れませんでした。でも六月、当時の古井厚相が

緊急輸入を決断、七月には全国の学童・乳幼児に投与されると八月には流行の拡大が収まりました。この間、頻繁に厚生省に呼び出されていた四〇代半ばの部長の髪には、気がつくともう白いものが混じっていました。相当なストレスだったことがうかがわれます。

多分一九六二年頃、韓国の公衆衛生関係者の白先生が研究生として来日されましたが、朴聖慈先生や賈先生より前に初めてお会いした本国在住の韓国人の方で、日本語がわかる世代の方でしたから親しくお話し出来ました。

セービン博士も特許を取りませんでしたので、ソーク六メーカーの共同出資による「日本ポリオ研究所」が製造を始め、しばらくすると検定は生ワクチンのみにになりました。

でも、一九六五年現・秋篠宮が誕生すると、天皇家は生ワクチンに不安があったのかソーク検定の依頼が来ました。「宮様ソーク」とか

言いながら、しばらくぶりの透析用セットを引つ張り出した記憶があります。

生ワクチンの検定は、重要な「脳神経毒力」だけでなく「組織培養」の安全試験も行われましたが、抗血清でポリオウイルスの働きを抑えたワクチンの「猿由来のウイルス・特にハムスターに腫瘍をつくるSV40」の否定が求められました。

検定通過量は、ソーク1・5リットルに対して生ワクチンは約5ccでしたから、作業は格段に楽になり、検定関連ということで腫瘍ウイルス研究の方にシフトして行きました。大流行の拡大を抑えた生ワクチンですが、強毒ウイルスへの先祖帰りという問題があります。そのために新たな不活化ワクチンが開発され、厚生労働省のホームページによりますと、「二〇一二年九月から「経口生ワクチン」の定期接種は中止され、不活化ワクチンの定期接種導入とのことです。

新型コロナウイルスは次々と毒性を増した変異株が生まれ、流行の拡大が収まっています。宿主として増殖場所を提供する人間とウイルスの緊張関係はずっと続きそうです。

六〇年前に責任者として矢面に立ち、苦闘した方々が今在世ならば・・・とふと思うことがあります。

## 愛恵福祉支援財団のついで

木村 真理子

い。

二〇二〇年三月、それまで働いていた大学の社会福祉学科を定年退職し、四月から公益財団法人愛恵福祉支援財団の常務理事として働いている。新たな仕事は財団の事業計画と管理運営を含む組織運営全般を含む。この組織はもともと愛恵学園と称し、アメリカのメソジスト教団から派遣されたM・ペイン宣教師が戦前から東京のある地域に拠点を置いて、子どもと家族に対して教育活動を通じたかわり(セツルメント)をとおして地域の変容を目指したのが始まりである。日本に派遣された宣教師や母体となった宣教師の活動は様々で、学校の設立に尽力した組織もあれば、地域開発に力を注いだ人や組織もある。セツルメントは、英国で始まり、アメリカに普及し、さらに世界各地にその手法を用いた社会活動が広がった。活動が開かれた場所の多くは、貧困地域で、子どもや家族に教育や心理社会的ななかかわりをもち、社会の底辺で生活している人々自身が自分の中に内在する力に気づき自らの手で地域を変容させるべく、近隣の人々と連帯する活動であった。ペイン宣教師がセツルメントという考え方を意識して活動していたかどうかその教育背景は定かではな

日本にはいくつものキリスト教を母体とする福祉活動があり、これらの活動は日本社会の変化に呼応して姿を変容させながら今日まで活動を存続させている。一方愛恵学園は社会変化に伴って当初の活動は終結を迎えた。当時監督を行っていた東京都は、愛恵学園に対して土地・建物を売却した財を元手に新たな福祉活動を展開するよう奨励した。こうして誕生したのが、現在の公益財団法人の前身で、都の監督下の二〇年を経て、公益財団法人として独立し出発、内閣府の監督下に置かれ一〇年を経過しようとしている。愛恵のミッションは、キリスト教精神にのっとり、献身性、先駆性、国際性を掲げ、社会福祉分野の人材養成と同分野の組織支援を主な活動の柱としている。

現在世界がコロナ禍にあつて、公益財団法人愛恵も事業に多くの影響を被っている。愛恵はそれまで多くの財源を海外研修に費やしてきたが、この活動は実施不可能となった。公益法人は運営上、一定比率を公益事業に振り向けなければならないが、この二年間はコロナの影響で従来の予算執行ができない状況に追い込まれた。熟慮の結果、私たちは緊急助成支援を検討・実施した。二〇二〇年度当

初、政府の公的助成制度が十分構築されていない状況下、助成金は施設の感染防止のための環境設備、面会制限下にある施設の電子機器の購入、感染防止(密を避けるため)に増員された臨時職員の給与などに充当された。スリランカ、モザンビーク、インド、タイからも支援の要望があり、助成金は生活困窮者の食糧配給や子どもの学用品購入などに充てられた。二〇二一年度は困窮学生に対する支援金の給付を実施している。ミャンマーからも支援要請が届いた。軍事クーデターに対して市民的不服従運動が続いている。公務員の医療ソーシャルワーカーもこの運動に参加しているが、運動参加により公営住宅からの退去、給料差し止めの制裁を受けている。彼らは遺棄乳幼児の身元引受人斡旋、薬の配達、救急搬送などの仕事を軍の圧政下でも継続している。医療関係者のネットワークを通して居住場所を伏せ、本来の活動を継続している。関西に拠点を置く日本ビルマ救済センターを通じて、関西の学生組織、その他の組織が支援金を現地に送金している。支援金はミャンマーの支援組織との連携のもと、ミャンマーの月給相当額が現地の運動参加者各個人に届けられている。

コロナ禍、

若いエネルギーの力に支えられて

池田 聖智子

昨年三月、私はフランスに行く予定でした。

一七年前に親子バレエクラスに来ていたフランス人の子が出演するパリオペラ座バレエ学校の卒業公演を観に行くためでした。半年前から準備をしていましたが二月頃からコロナが騒がれはじめ、三月にはフランスでも感染が広がり公演は中止になりました。その後フランスはロックダウン。パリに三〇年以上住んでいる知り合いは「こんなパリは見たことがない」とショックを受けていました。そして日本も緊急事態宣言が発令され、私のバレエスタジオも東京都の休業要請の対象となり、約二ヶ月間休業を余儀なくされました。

最初はどうかなるのかわからず途方に暮れてしまいました。しかし子供達から「レッスンがしたい」との声があり、止まっている場合ではないと、この状況下でもできる方法はないかと東京都に問い合わせました。休業要請対象でもリモートレッスンは可能だという事だったので、IT関係の仕事をしている会員の方に協力してもらいオンラインレッスンを立ち上げました。分野的にオンラインレッスンはなかなか難しいところもありますが、空

間条件を考えながらの新しいレッスン方法を開拓できる機会でもありました。子供たちのエネルギーのお陰で一回目の緊急事態宣言は乗り切れる事ができました。収入面の不安ももちろんありましたが、二一年間事業所として運営してこられたので、東京都の協力金や国の給付金を受けることができました。慣れない手続きの書類などは、お世話になっっている会計事務所や大家さんのご協力を得て申請手続きすることができました。大変な感謝しています。その後は蔓延防止や緊急事態宣言の繰り返しで、八月現在元の通常レッスンには戻っていません。スタジオレッスンは人数を制限し、リモートレッスンも併用しています。オンラインレッスンはネット環境の不具合などのトラブルも起こりますが、遠方の方でも参加できるメリットはやはり大きいです。お陰で埼玉県から通っている子供達も、緊急事態宣言下でもリモートで参加できるようになりました。また、フランスの大学に留学した会員の方もリモートでレッスンに参加している。今のフランスの現状も聞く事ができます。ある意味、コロナは世界の距離を縮めてくれました。そしてコロナ禍でも嬉しいニュースもありました。フランス人の彼女が、オペラ座バレエ学校を卒業後、パリオペ

ラ座バレエ団の入団試験に合格したと。学校を卒業できても、バレエ団への入団は難関中の難関。見事にやり遂げてくれました。コロナ禍で思うようにレッスンはできず、公演も中止になり精神的にも大変辛かったはずですが、苦しい状況を乗り越えた一七歳の若いパワーにスタジオの皆も大変励まされました。一月にパリオペラ座バレエ団のニューイヤーク公演が無観客で開催され、無料配信された動画をフランスから送ってきてくれました。本来ならば現地に行かなければ観る事ができない世界最高峰のパリオペラ座バレエ団の特別公演を、東京で、スタジオの子供達、親御さん達もご覧になりとても喜んで頂けました。プロのバレリーナとなって舞台に登場してきた彼女の姿を見た時は、本当に感無量でした。コロナ禍でも頑張っている若いエネルギーは素晴らしいです。昨年九月にフランスの大学に合格し大手企業の正社員をキツパリ辞め、コロナ禍のフランス留学に挑んだ三〇歳の女性会員も、大人の会員達にいい刺激を与えてくれています。若いエネルギーに励まされ、私もまたスキルアップの勉強を始めました。コロナ終息はまだまだ先のようにですが、今の状況下で自分にできる仕事を一生懸命やらせていただこうと思えます。



## 図書紹介

## 『トマス・アキナス』

山本芳久著（岩波新書）

著者と作品とを線で結びなさいという問題で、紫式部なら『源氏物語』、トマス・アキナスなら『神学大全』。二一世紀になってその日本語訳が出版されました。四五巻。著者は途中で執筆を止めてしまったのだそうです。彼の著作全体となると、その七倍もあるようで、全貌を知るなんて無理ですが、そうであれば一層気に懸かる人・本です。

この新書ではサブタイトルが「理性と神秘」と付いています。理性はトマス・アキナスとアリストテレスの繋がるところで、神秘の方はアリストテレスと、全知全能の神のヒトに対する（イエスを遣わした）愛を以って整合性を保つ試みを言っていると思われまます。イエス・キリストよりも遙か昔に、創造主・神に就いて知らずに、此の世・世界を観察・考察したアリストテレスを読み、手本にしてキリスト教と折り合いをつける努力です。（カトリック世界では、イスラム経由で入ってきた、その当時のラテン世界よりも進んでいたアラビアの文化にどう接するかは重大な課題だったのです。）

アリストテレスはキリスト教を知りませんがその著作はトマス・アキナスの見たところでは、合理的で妥当なので、排斥・否定することこそ不合理であり、撰取する方向へ進みます。この柔軟・進取の精神は偉大だと思

います。（少し外れますが、アラビア経由で入ってきた知識は、人文系ではこのアリストテレス、理系としてはアラビア数字があります。惑星の軌道計算を鉛筆と紙でこなせるようになり、天動説からの脱却、ルネッサンスへと歴史は流れてゆきます。）

免罪符に怒ったルターが「聖書のみ・恩寵のみ・信仰のみ・万人司祭主義」を主張し、聖書をラテン語からドイツ語に翻訳し、信徒が聖職者の媒介無しで神の言葉に接するようになりましたが、宗教改革の後では、トマス・アキナスのような開かれた精神は見落とされがちです。その合理的精神、この世の種々（くさぐさ）の現象と人間の生活を神との関わりの中に置いて細かい所まで理由づける誠実さは、アキナスならではの魅力でしょう。

本の紹介と言うにはかなり勝手なことを書きました。大いに楽しんで読みました。インターネットを利用可能なら検索によって更に興味深いエピソードにも出会えることでしょう。山本芳久氏には『世界は善に満ちている トマス・アキナス哲学講義』（新潮選書）という本もあります。こちらは、より神学大全を想像するに向いた本でした。

（小川 耕一）



## ろばのせなか

人間が痛めつけてしまっている地球環境を考えるとき、坂真理子さんの「科学的な解明をせずにそのままにしておいていい不思議もある」という言葉に共感します。

ソウルにいる容來さんの証詞はZOOMによって可能になりました。八月一日という日にふさわしくこれからの日韓関係を進めていく貴重な指針です。より多く日本側に責任があることを自覚し考えていきたいです。

いつ果てるともわからないコロナの広がりの中でワクチン接種が急がれます。古野さんの話からワクチンを接種できるまでにはその検定だけでもかなりの時間と緻密な試験が必要なのだわかります。コロナワクチン開発には一人の女性研究者の四〇年を超える地道な研究があったと報道で知りました。

木村さんと池田さんの活動分野はまるで違いますが、昨年から続くコロナ状況の中で、従来の活動を大きく制限されながらもお二人とも様々に工夫し前に進み活動を広げています。励まされます。特に軍政下のミャンマーで抵抗する市民を支援する活動につながっていることに注目します。

小川耕一さんは古い仲間です。「大いに楽しんで読みました」というトマス・アキナスを楽しむ方が増えるといいなと思います。表紙と八ページを除き従来より行間を空けています。読みやすいようにとの試みです。感想をお聞かせ下さい。（小池 恵子）